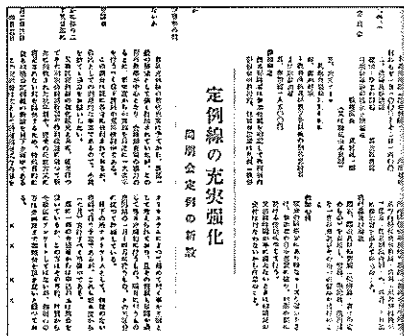


点描

北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No. 8

1965  
昭和40年

同朋会定例新設を表明する記事  
(『教学通信』昭和40年4月)



教区定例法座

同朋会定例の新設に至る前史

教区の「生命線」とも称される教区定例。現在、十三線・二一カ寺が開席されている。この間、さまざま協議、試行錯誤が重ねられてきた。その一つが一九六五年(昭和40)、北海道教区教学委員会による「同朋会定例」である。

\*

教区定例の始まりは、「大谷婦人法話会(現大谷婦人会)」が、婦人教化と単位組織の充実をはかるために設定した「婦人会定例」に見ることができる。

大谷婦人法話会は、明治期の東京浅草本願寺別院・貴婦人法話会発足が機縁と伝えられるが、『北海道開教百年史』は、現如上人が西洋の宗教事情視察のため渡欧し、婦人が宗教的な団体を組織して盛んに活動している様子を見聞してきたことにあるとする。その後、一八九〇年(明治23)に本山内に「大谷派婦人法話会」が創設さ

れ、法話を聴聞する場として毎月一回、継続して開催された。婦人会員の全国募集は、日露戦争の勃発と同年である。当時の大谷派は国家の機密情報に関しても先鋭的に収集し、常に国家に先立つた行動を起こしている。この時も各地に法話会の支部・支場が設けられ、婦人会員は聴聞と共に恤兵・救護等の各方面にわたる活動を行った。

北海道教区では、一九〇九年(明治42)の彰如上人來道を期に婦人会加入が奨励され、「婦人法話会北海道分会」を結成。一九四九年(昭和24)には「大谷婦人会」と改称。一九七〇年(昭和45)の創立八十年記念式時点での全国の支部総数は五七六支部。北海道は全国トップの32%一八五支部を有していた。二位名古屋の四三支部と比較すれば、いかに大きな組織であったかが伺える。

\*

「婦人会定例」は、戦前の昭和初期に始まった。当初の体制は、専任の布教使が常駐し、四線をもって発足。専任講師には本多良晃・谷山祐寛の両師が務めた。特に本多師は、北海道大谷婦人会専属布

教使として三〇余年勤続。謹厳・誠実・厚信と評される。宿寺となつた寺院では障子越しに影絵も行った。子どもたちは本多師がやってくるのを心待ちにしていたという。教区定例の礎を築いたのは、本多良晃師であるといつても過言ではない。

また、戦時下の非常時局に対応した北海道大谷報国団を解消し、新たに結成された「北海道布教団」が、その実践活動の場として定例線を新設した。さらに宗祖御遠忌お待ち受けを期した「特別伝道」も布教団が担った。対象は定例線に加盟していない寺院である。

教区内にあった二つの定例線は、一九五二年(昭和27)頃に一本化され、運営が教務所に委ねられることとなった。一九六七年(昭和42)の現況は、全十線・二八〇カ寺を数えた。

しかし、教区定例は、すべて順調であつたわけではない。紆余曲折を経て、真宗同朋会運動の前期教習修了者、特別伝道によつて新に見出された青壮年層を対象とする「同朋会定例」の新設が試みられていく。